様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：２２７０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ１３８４７

研究課題名（和文）ニクラス・ルーマンの包摂／排除論：ポスト・ナショナルな福祉国家の社会理論に向けて

研究課題名（英文）Inclusion/Exclusion in Luhmann's System Theory: Toward a social theory of the post-national welfare state

研究代表者
渡會　知子（WATARAI, Tomoko）

横浜市立大学・国際教養学部（教養学系）・准教授

研究者番号：１０５８８８５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：ドイツの社会学者N.ルーマンの「包摂/排除」の概念的考察および、ドイツにおける移民支援の実態調査を行い、理論枠組みと経験的調査との相互発展を目指した。理論研究においては、従来のシステム理論的アプローチに空間論や官僚制論など新たな視点を加えて検討し、調査分析のための方法論的示唆を得た。調査研究においては、近年のドイツにおける「ポスト移民社会」言説の動向を踏まえ、ベルリンで文化政策の運用実態調査に着手した。またミュンヘンにおける調査を再開し、都市間比較研究へと展開する道筋をつけた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、高度に抽象的なルーマンの理論を、ドイツにおける移民支援調査によって得られた知見と関わらせながら再検討するものである。それによって、移民支援に関する社会学的な分析力の向上を目指すとともに、システム理論研究としても新たな段階を用意する。また、本研究では、政策的側面のみならず、移民支援の現場の実状に沿って、地方自治体の役割、文化政策の重要性、「支援する／される」という二元論を越えたエンパワーメントの取り組みなど実践的な知見を集めている。こうした実例と動向の分析は、外国人住民の受け入れと共生のあり方について議論が広がり始めている日本においても重要性を持つ。

研究成果の概要（英文）：This project involved a conceptual study of German sociologist N. Luhmann's 'inclusion/exclusion' theory and an empirical survey on the actual conditions of migrant support in Germany, aiming for the mutual development of theoretical frameworks and empirical research. The theoretical study incorporated new perspectives, such as spatial theory and the theory of street-level bureaucracies, into the traditional systems theory approach, providing methodological insights for survey analysis. The empirical part of this project began by investigating the actual conditions of cultural policy implementation in Berlin, considering recent trends in the 'post-migrant society' discourse in Germany. Additionally, it resumed the survey in Munich, paving the way for comparative studies between cities with different backgrounds.

研究分野：社会学　社会理論　社会システム理論

キーワード：包摂　排除　移民　空間　ルーマン　システム理論　ポスト移民社会　ストリートレベルの官僚制

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）　ドイツにおける社会政策の変容

2000 年代中頃から、ドイツにおける政策的・学問的関心の焦点となってきたもののひとつに、ソーシャル・ワーク、言い換えれば「ローカルな援助の実践」があった。どちらかというと常にマクロな構造的問題に関心を向けてきたドイツの社会学や社会政策学において、「パラダイム転換」とも言われる関心の移動の背景には、直接的には、ハルツ改革による活性化（アクティベーション）戦略の導入がある。失業手当の給付条件として職業訓練への参加などを義務づけたこの施策は、当事者の参加を促すソーシャル・ワーク的な働きかけなしには実現されないものであった。こうして地方自治体レベルの裁量が拡大されるとともに、現場でのミクロな相互作用実践に、マクロな課題解決の鍵としての期待が寄せられるようになった。

（２）　社会学におけるネオリベラリズム批判

活性化政策とソーシャル・ワークとの関係変容を論じる研究は多く出版され、まとまった論文集も編まれてきた(Dahme/Wohlfahrt 2005)。それらによれば、活性化戦略は福祉国家理念の衰退の象徴であり(Homann/Pries 1996)、強制的な性格を持ち(Walther 2003, Völker 2005)、新たな管理技術としてソーシャル・ワークを道具化するものである(Kessl 2000, Ziegler 2001)。しかし、そのような視点からソーシャル・ワークを位置づけることに対して、現場に近い研究者から「実践からの乖離」という違和感も表明されており (Hinte 2006: 17)、また理論的にも、そうした議論(ネオリベラリズム批判)は福祉国家の反省理論の構築には至らず(Nassehi 2003: 331)、旺盛な研究の蓄積とは裏腹に、むしろ「福祉国家の理論的言語喪失」(Lessenich 2003: 425)に陥っているという危機意識が語られていた。

（３）　本研究の位置づけ

「実践からの乖離」と「理論的言語喪失」という、一見すると逆を向く二つの指摘は、しかし、本研究の見るところ、相互に繋がっている。活性化を焦点とする福祉国家の姿は、従来のイデオロギー批判だけでは十分に捉え難いものになってきており、むしろ、構造的背景との相関のもとで、現場の無数のプラクシスの固有の論理をいかに掬うことができるか(いわば「社会的なものの再発明」(Lessenich 2008)の様子を政策次元においてだけでなく遂行的局面において捉えること)が、現行の変化の十全な理解に欠かせなくなっていると考えられた。

２．研究の目的

本研究では、上記のような理論的・時代的要請を視野に入れ、以下を目的とした。

（１）　N.ルーマンのシステム理論を「包摂/排除」概念を手がかりに再構成し、福祉政策の実践的局面を捉えるための枠組みとして検討すること。意味づけの問いとして論じられるルーマンの包摂/排除概念は、貧困や格差を中心に語られてきた包摂論に対して、「意味をめぐるプラクシス」という観点を導入する。それによって、「権力論の過剰」(Hillebrandt 2006)と言われる既存の枠組みを相対化し、社会学理論の分析能力の向上を図る。

（２）　上記の理論研究と並行して、ドイツの地方自治体における移民支援の調査を行う。理論枠組みの検討と、現場の実態に寄り添った質的調査とをともに行うことで、いわゆる「実践からの乖離」と「理論的言語喪失」をともに乗り越え、相互発展的に知見を拡充することを目指す。

（３）　以上の議論を、同時代の社会理論や政策的議論と関わらせながら検討する。それによって、システム理論的包摂論の特性を明らかにするとともに、領域横断的な射程を持った社会学研究の基礎理論を用意する。

３．研究の方法

上記の目的を達成するため、本研究では主に以下の四つの細目課題を設定した。

・　支援の遂行局面に注目した包摂と排除の概念的考察
・　社会システム理論以外の視点の導入による概念の精緻化
・　移民研究における諸概念との比較検討

・　ドイツにおける調査の実施と都市間比較研究への展開

４．研究成果

（１）　空間論への展開

本研究を進める中で、社会システム理論の包摂／排除概念を経験的現実に引き寄せて考えるためには、「空間」という視点からの考察が非常に重要であることが明らかとなった。そこで本研究では、社会システム理論における空間の位置づけについて検討し、そこから得られる方法論的示唆を考察した（論文「N.ルーマンのシステム理論における『空間』の意味：ドイツ福祉国家の再編とローカルな援助の関係変容に寄せて」『社会学史研究』収録）。また、E.カントの空間概念に遡ることによって、これを社会学に導入して発展させたG.ジンメルとN.ルーマンのアプローチを比較検討した（国際学会発表 ”From Space to Boundary: An ‘atopic’ pathway of social theory from Simmel to Luhmann.” International Sociological Association (ISA) XIX World Congress of Sociology.）哲学的原理に辿って概念の射程を問い直し、移民支援の現場の力学を分析するための社会学的方法論へ結びつけたことは本研究の大きな成果だった。こうした議論の深まりと広がりは、厳密には当初の計画にはないものだったが、国内外で成果を発表する機会に恵まれ、新たな展開をみることができた。

（２）　ドイツにおける「ポスト移民社会」の動向調査と文化政策の役割

もうひとつ、当初の予想を超えて進められた成果として、「ポスト移民社会」に関する理論的・経験的調査が挙げられる。「ポスト移民社会」は、近年、ドイツのアートシーンを主な発信源として、社会学、メディア、政治などを巻き込みながら急速に存在感を増してきた社会認識の方法である。これは従来の「統合」という標語に見られる「ドイツ人／外国人」「受け入れる側／受け入れられる側」「支援する側／される側」などの単純な二項対立を越えたところで社会を記述・構想する概念であることに特徴がある。本研究では、この概念の発展史を理論的に整理した上で、議論が最も盛んなベルリンにおいて調査を行なった。演劇、映画、博物館や美術館における展覧会、ダンスパフォーマンスなど、多様な文化的表現、およびそれを支援する文化政策が、移民との共生というテーマにどれほど重要であるかということにフォーカスを当てて検討した。こうした考察を、ドイツ文学研究者らの協力を仰ぎながら、文芸公共圏・対抗公共圏の役割という視点に関連づけて領域横断的な議論へと展開した。

（３）　「移民による移民支援」の都市間比較調査への展開

ドイツでは、移民が移民を支援する制度的枠組みが2010年前後から試行されてきた。研究代表者がかつてミュンヘンで調査をしていた当時は、まだ萌芽的な試みであったが、この10年間の間に、とりわけベルリンでは16もの団体が公的に制度化・資金提供されるまでに大きく成長していた。本研究では、そうした動向を追跡的に調査した。また、ミュンヘンだけでなくベルリンへと調査対象都市を広げた。これにより、社会経済的背景が異なる自治体において政策と実践がどのように（別様に）展開するのかという、都市間比較研究への道筋をつけることができた。

（４）　官僚制論との関連づけと批判的発展

包摂と排除の概念を、制度の運用局面に着目する「ストリート・レベルの官僚制」概念と結びつけて検討し、「排除する／される」「援助する／される」という単純な立場性だけでは回っていない現場の力学について考察した。（国際学会論文発表 ”Complex, Dynamic and Sensitive: Street Level Bureaucracy as a Reflexive Contact Zone.” International Sociological Association (ISA) XX World Congress of sociology.）制度の運用局面において、差別や排除などの権力関係が顕になることは従来より指摘されていたが、それだけではなく、むしろ立場性や論理、価値意識が異なるものの接触の只中において、既存の認識の再帰的変容が行われていく様子を、実際の事例から描き出した。

以上の成果を基礎とし、また本研究において新たに得られた国内外の研究者および調査対象者との繋がりを活かすことによって、新たな研究プロジェクト（23K12602）に至る建設的な基盤を得ることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 渡會知子	４．巻 -
２．論文標題 希望の語り方ーE.ブロッホ『希望の原理』と「他でもあり得る」現実の行方	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『地方創生の希望格差：寛容と幸福の地方論Part.3』	６．最初と最後の頁 31-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 渡會知子	４．巻 -
２．論文標題 遊びの自由－距離化の運動と管理社会批判	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『"遊び"からの地方創生：寛容と幸福の地方論Part.2』	６．最初と最後の頁 34-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 斉藤史朗・佐藤典子・橋本直人・渡會知子・出口剛司	４．巻 43
２．論文標題 今、学説史研究の未来と可能性を考える	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『社会学史研究』	６．最初と最後の頁 19-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 渡會知子	４．巻 -
２．論文標題 ＜個人化する社会＞の想像力	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『住宅幸福論Episode.3ーlonely, happy, liberties. ひとり暮らしの時代』	６．最初と最後の頁 36-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 渡會知子	4．巻 1144
2．論文標題 ＜名著再考＞　ニクラス・ルーマン『社会システム理論』を読む	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『思想』	6．最初と最後の頁 136-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 渡會知子	4．巻 -
2．論文標題 モノとの関係を結びなおす－住まいとインテリアをめぐる美学的試論	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『住宅幸福論Episode.2－幸福の国の住まい方：日本・デンマーク住生活比較調査』	6．最初と最後の頁 34~43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 渡會知子	4．巻 39
2．論文標題 N・ルーマンのシステム理論における「空間」の意味ードイツ福祉国家の再編とローカルな援助の関係変容に寄せてー	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『社会学史研究』	6．最初と最後の頁 7-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 Tomoko WATARAI
2．発表標題 Complex, Dynamic and Sensitive: Street Level Bureaucracy as a Reflexive Contact Zone.
3．学会等名 International Sociological Association (ISA) XX World Congress of Sociology（国際学会）
4．発表年 2023年

１．発表者名 Tomoko Watarai
２．発表標題 From Space to Boundary: An "atopic" pathway of social theory from Simmel to Luhmann
３．学会等名 International Sociological Association (ISA) XIX World Congress of Sociology（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

１．著者名 ジョン・スコット編著、白石真生・栃澤健史・内海博文監訳	４．発行年 2021年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 376
３．書名 『キーコンセプト 社会学』	

１．著者名 景山佳代子、白石真生、内海博文、渡會知子、鈴木富美子、北野雄士、太田美帆	４．発行年 2020年
２．出版社 法律文化社	５．総ページ数 204
３．書名 『DIY＜自分でする＞社会学』	

１．著者名 友枝 敏雄、浜 日出夫、山田 真茂留編	４．発行年 2017年
２．出版社 有斐閣	５．総ページ数 312
３．書名 『社会学の力ー最重要概念・命題集』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関